

I. 答申内容

(1) 重要無形文化財の指定及び保持者の認定（各個認定）

年齢は平成 29 年 7 月 21 日現在

重要無形文化財	保 持 者		
名称	氏名（芸名・雅号）	生年月日（年齢）	住所
（芸能の部）			
のうはやしかたこつみ 能囃子方小鼓	おおくら げんじろう 大倉 源次郎	昭和 32 年 9 月 7 日 (満59歳)	東京都世田谷区
くみおどりおんがくたいこ 組 踊 音楽太鼓	ひ が さとし 比嘉 聡	昭和 27 年 4 月 8 日 (満65歳)	沖縄県那覇市
（工芸技術の部）			
こいしわらやき 小石原焼	ふくしま よしぞう 福嶋 善三 (ふくしま ぜんぞう) (福島 善三)	昭和 34 年 10 月 29 日 (満57歳)	福岡県朝倉郡 東峰村

(2) 重要無形文化財の保持者の追加認定（各個認定）

年齢は平成 29 年 7 月 21 日現在

重要無形文化財	保 持 者		
名称	氏名（芸名・雅号）	生年月日（年齢）	住所
（芸能の部）			
にんぎょうじょうるり 人 形 浄瑠璃 ぶんらくにんぎょう 文楽人 形	おぎの つねとし 荻野 恒利 よしだ かずお (吉田 和生)	昭和 22 年 7 月 28 日 (満69歳)	兵庫県芦屋市

(3) 重要無形文化財の指定及び保持者の団体の構成員の認定（総合認定）

年齢は平成 29 年 7 月 21 日現在

重 要 無 形 文 化 財			保 持 者			
名 称	保持者及びその代表者の氏名	所属する機関又は団体	氏 名	芸 名	生年月日 (年齢)	住 所
長唄	伝統長唄保存会会員 代表者 川原 壽夫 (鳥羽屋 里長)	東京都中央区銀座 2-11-19 銀座市川ビル 4 階 一般社団法人長唄協会内 伝統長唄保存会	唄 (26名)			
			杵家 安廣	杵屋 喜三郎	大正12年 11月21日 (満93歳)	東京都港区
			犬飼 基之	稀音家 義丸	昭和5年 4月12日 (満87歳)	東京都目黒区
			宮田 哲男		昭和9年 3月25日 (満83歳)	東京都新宿区
			藤田 喜三太郎	岡安 喜代八	昭和9年 8月15日 (満82歳)	東京都荒川区
			大久保 隆子	芳村 伊十衛	昭和10年 5月16日 (満82歳)	東京都文京区
			馬場 實	吉住 小良次	昭和10年 11月26日 (満81歳)	東京都文京区
			村上 あや子	杵屋 佐臣	昭和11年 1月23日 (満81歳)	東京都豊島区
			川原 壽夫	鳥羽屋 里長	昭和11年 2月4日 (満81歳)	東京都新宿区
			橋本 いさ子	吉住 小代君	昭和11年 5月21日 (満81歳)	東京都武蔵野市
			青柳 晴彦	杵屋 彌十郎	昭和12年 2月15日 (満80歳)	東京都大田区
			中嶋 敏之	今藤 尚之	昭和12年 8月2日 (満79歳)	東京都世田谷区

			新井 富美子	杵屋 勝良	昭和12年 12月29日 (満79歳)	東京都新宿区
			芦澤 瑞代	杵屋 巳丞	昭和13年 11月11日 (満78歳)	東京都武蔵野市
			橋本 知子	今藤 美知	昭和16年 5月7日 (満76歳)	東京都世田谷区
			小田 隆弘	芳村 伊十郎	昭和19年 2月5日 (満73歳)	東京都文京区
			小鷺 慶子	松永 圭江	昭和20年 2月11日 (満72歳)	東京都目黒区
			宮川 尚久	杵屋 佐陽	昭和20年 4月12日 (満72歳)	東京都北区
			太田 孝彦	芳村 伊四郎	昭和20年 9月9日 (満71歳)	東京都世田谷区
			大友 雄子	杵屋 佐姫	昭和21年 1月22日 (満71歳)	東京都杉並区
			木村 仁	杵屋 佐之隆	昭和21年 8月19日 (満70歳)	東京都大田区
			石村 和人	白告 小三八	昭和24年 2月27日 (満68歳)	東京都目黒区
			石川 公一	杵屋 東成	昭和24年 4月24日 (満68歳)	大阪府大阪市
			木村 陽子	杵屋 喜三以満	昭和30年 2月22日 (満62歳)	石川県金沢市
			中村 郁子	今藤 郁子	昭和32年 3月29日 (満60歳)	東京都品川区
			杉田 勉	杵屋 三左衛門	昭和35年 7月5日 (満57歳)	東京都江東区

			吉住 彰規	吉住 小三郎	昭和39年 11月17日 (満52歳)	東京都新宿区
			三味線 (27名)			
			木村 さち子	杵屋 響泉	大正3年 11月15日 (満102歳)	神奈川県小田原市
			遠藤 康子	貴音 康	大正9年 9月28日 (満96歳)	東京都目黒区
			杵家 安八郎	杵屋 寒玉	大正14年 10月19日 (満91歳)	東京都港区
			山崎 好一	杵屋 六翁	昭和7年 8月20日 (満84歳)	東京都江東区
			味見 亨	東音 味見 亨	昭和7年 9月5日 (満84歳)	神奈川県横浜市
			鈴木 静子	杵屋 静子	昭和10年 6月7日 (満82歳)	東京都台東区
			中川 昇一	今藤 政太郎	昭和10年 10月10日 (満81歳)	東京都世田谷区
			河野 正純	杵屋 栄敏郎	昭和11年 11月18日 (満80歳)	東京都杉並区
			宮澤 雅之	杵屋 浄貢	昭和12年 11月16日 (満79歳)	東京都世田谷区
			地原 幸恵	杵屋 勝幸恵	昭和13年 6月18日 (満79歳)	北海道函館市
			竹中 建太郎	杵屋 和吉	昭和15年 1月19日 (満77歳)	神奈川県藤沢市
			阪下 映子	日吉 小暎	昭和15年 9月10日 (満76歳)	東京都世田谷区
			吉住 蕎子	吉住 小三代	昭和15年 11月7日 (満76歳)	東京都千代田区

			岸畑 年治	杵屋 勝寿治	昭和16年 1月6日 (満76歳)	兵庫県川西市
			吉田 成一	松永 忠五郎	昭和16年 1月24日 (満76歳)	東京都港区
			入倉 健治	稀音家 助三 朗	昭和16年 11月27日 (満75歳)	東京都品川区
			大橋 定世	松永 定世	昭和17年 10月5日 (満74歳)	東京都杉並区
			牟田口 照國	杵屋 勝国	昭和20年 3月28日 (満72歳)	東京都新宿区
			坂田 早苗	今藤 長十郎	昭和22年 6月4日 (満70歳)	東京都港区
			赤星 輝幸	杵家 弥七	昭和23年 1月12日 (満69歳)	東京都世田谷区
			石川 雅英	杵屋 勝禄	昭和24年 4月24日 (満68歳)	大阪府大阪市
			桂 哲郎	杵屋 六三郎	昭和26年 2月7日 (満66歳)	東京都江東区
			武藤 吉彦	杵屋 佐吉	昭和28年 1月2日 (満64歳)	東京都世田谷区
			増田 豊	杵屋 五三郎	昭和30年 11月1日 (満61歳)	東京都台東区
			高野 修	今藤 美治郎	昭和35年 3月30日 (満57歳)	東京都中央区
			馬橋 敦	松永 鉄九郎	昭和35年 4月5日 (満57歳)	東京都練馬区
			坂口 清治郎	杵屋 勝三郎	昭和42年 6月13日 (満50歳)	東京都港区

			鳴物（15名）			
			あべ 康仁	かただ 喜三久	昭和10年 9月8日 （満81歳）	東京都中央区
			なかがわ 勲	とうしや 名生	昭和16年 3月28日 （満76歳）	京都府京都市
			すなおし 伐	ほうせい 晴由	昭和18年 4月28日 （満74歳）	東京都東久留米市
			たちばな 利明	とうしや 呂船	昭和19年 9月20日 （満72歳）	東京都新宿区
			いのまた 豊成	ふくはら 鶴祐	昭和20年 10月12日 （満71歳）	東京都大田区
			すゑ 好一	もろつき 太左治	昭和22年 9月13日 （満69歳）	東京都足立区
			かめい 令子	たなか 佐太郎	昭和23年 5月26日 （満69歳）	東京都新宿区
			ぼん 十九二	すみ た 長三郎	昭和23年 8月19日 （満68歳）	東京都中央区
			もりや 輝信	うめや 福太郎	昭和24年 5月25日 （満68歳）	東京都世田谷区
			たかばし 清彦	せんば 清彦	昭和29年 12月23日 （満62歳）	東京都杉並区
			あべ 久恵	もろつき 太左衛	昭和31年 8月30日 （満60歳）	東京都台東区
			あべ 久勝	もろつき 太左衛 門	昭和34年 4月13日 （満58歳）	東京都中央区
			あべ 久雄	もろつき 朴清	昭和34年 4月13日 （満58歳）	東京都台東区

			藤堂 賢太郎	福原 百之助	昭和50年 12月1日 (満41歳)	東京都杉並区
			亀井 孝之	田中 傳左衛門	昭和51年 3月2日 (満41歳)	東京都杉並区

(4) 重要無形文化財の保持者の追加認定（総合認定）

年齢は平成 29 年 7 月 21 日現在

重 要 無 形 文 化 財			保 持 者			
名 称	保持者及びその代表者の氏名	所属する機関又は団体	氏 名	芸 名	生年月日 (年齢)	住 所
人形浄瑠璃 文楽	人形浄瑠璃文楽座座員 代表者 (太 夫) 岸本 欣一 (竹本 住太夫) (三味線) 白井 康夫 (鶴澤 寛治) (人 形) 平尾 勝義 (吉田 襄助)	大阪府大阪市中央区日本 橋1-12-10 独立行政法人日本芸術文 化振興会国立文楽劇場内 人形浄瑠璃文楽座	太夫 (1名)			
			金木 大介	豊竹 睦太夫	昭和48年 11月14日 (満43歳)	奈良県奈良市
			三味線 (4名)			
			松本 堅牛	鶴澤 清丈	昭和49年 10月7日 (満42歳)	大阪府大阪市
			木ノ原 啓	鶴澤 友之助	昭和55年 11月12日 (満36歳)	大阪府大阪市
			坪井 崇通	鶴澤 清旭	昭和55年 11月29日 (満36歳)	大阪府大阪市
			槌谷 有紀哉	鶴澤 寛太郎	昭和62年 6月18日 (満30歳)	大阪府大阪市
			人形 (2名)			
			岡 浩章	桐竹 紋吉	昭和48年 7月23日 (満43歳)	大阪府大阪市
			藤田 圭	吉田 玉翔	昭和50年 12月18日 (満41歳)	大阪府交野市

のうがく 能楽	一般社団法人日本能楽会会員 代表者 野村 四郎	東京都豊島区東池袋 3-20-6 岩波ビル401号 一般社団法人日本能楽会	シテ方（観世流）（24名）			
			うめわか 梅若 泰志		昭和42年 8月23日 （満49歳）	東京都世田谷区
			ふるかわ 古川 充	ながしま 永島 充	昭和43年 7月4日 （満49歳）	東京都杉並区
			は 基 がわ 長谷川 晴彦		昭和44年 2月22日 （満48歳）	東京都中央区
			やまぐち 山口 剛一郎		昭和45年 4月5日 （満47歳）	佐賀県佐賀市
			のむら 野村 昌司		昭和45年 12月3日 （満46歳）	東京都杉並区
			さくま 佐久間 二郎		昭和47年 12月11日 （満44歳）	東京都小金井市
			ながやま 長山 耕三		昭和48年 5月2日 （満44歳）	兵庫県芦屋市
			あかの 深野 貴彦		昭和48年 7月5日 （満44歳）	京都府京都市
			いまむら 今村 一夫		昭和48年 7月31日 （満43歳）	福岡県福岡市
			しみず 清水 義也		昭和48年 9月11日 （満43歳）	東京都品川区
			よしだ 吉田 篤史		昭和49年 2月22日 （満43歳）	京都府向日市
			はしもと 橋本 忠樹		昭和49年 5月2日 （満43歳）	京都府向日市
			さかい 坂井 音雅		昭和49年 6月14日 （満43歳）	東京都渋谷区
			い 戸 井戸 良祐		昭和49年 9月24日 （満42歳）	大阪府大阪市

			清水 友志	武田 友志	昭和49年 10月5日 (満42歳)	東京都中野区
			浅見 香寿子	立花 香寿子	昭和50年 6月22日 (満42歳)	兵庫県西宮市
			角 幸二郎		昭和50年 9月1日 (満41歳)	東京都目黒区
			谷本 健吾		昭和50年 11月10日 (満41歳)	東京都杉並区
			大江 信行		昭和51年 1月11日 (満41歳)	京都府京都市
			坂井 普隆		昭和51年 2月6日 (満41歳)	東京都渋谷区
			長山 桂三		昭和51年 5月13日 (満41歳)	東京都世田谷区
			坂口 貴信		昭和51年 8月11日 (満40歳)	東京都目黒区
			西田 信輔	齊藤 信輔	昭和51年 9月24日 (満40歳)	大阪府大阪市
			堀部 大志	武田 大志	昭和51年 10月1日 (満40歳)	兵庫県尼崎市
			シテ方（金春流）（1名）			
			山井 綱雄		昭和48年 5月25日 (満44歳)	神奈川県横浜市
			シテ方（宝生流）（5名）			
			白坂 弘能	久賀 弘能	昭和38年 6月24日 (満54歳)	福岡県福岡市
			坂口 愛	衣斐 愛	昭和48年 11月23日 (満43歳)	愛知県名古屋
			小林 晋也		昭和49年 11月21日 (満42歳)	埼玉県新座市

			たかはし のりまさ 高橋 憲正		昭和51年 4月29日 (満41歳)	東京都文京区
			ほうしょう なずみ 賢生 和英	ほうしょう かずみ 宝生 和英	昭和61年 1月8日 (満31歳)	東京都文京区
			ワキ方（宝生流）（1名）			
			ひらき とよお 平木 豊男		昭和30年 11月10日 (満61歳)	石川県金沢市
			笛方（森田流）（2名）			
			つちや りょう 槌矢 亮	のぐち りょう 野口 亮	昭和40年 6月20日 (満52歳)	兵庫県神戸市
			さこう やすひろ 左鴻 泰弘		昭和41年 12月11日 (満50歳)	京都府京都市
			笛方（藤田流）（1名）			
			たけいち まなぶ 竹市 学		昭和47年 2月27日 (満45歳)	愛知県稲沢市
			小鼓方（幸流）（1名）			
			ふる た とみひで 古田 知英		昭和49年 2月13日 (満43歳)	兵庫県西宮市
			小鼓方（大倉流）（2名）			
			てらさわ やすこ 寺澤 陽春子	ひさだ やすこ 久田 陽春子	昭和48年 2月11日 (満44歳)	兵庫県西宮市
			うえだ 敦史 上田 敦史		昭和48年 6月8日 (満44歳)	兵庫県丹波市
			大鼓方（葛野流）（1名）			
			はらおか かずゆき 原岡 一之		昭和52年 11月13日 (満39歳)	東京都中野区
			太鼓方（金春流）（1名）			
			かたに ひで 梶谷 英樹		昭和45年 6月22日 (満47歳)	東京都杉並区

			狂言方（大蔵流）（5名）			
			しげやま まさくに 茂山 正邦	しげやま せん ごろう 茂山 千五郎	昭和47年 7月7日 （満45歳）	京都府京都市
			おおくら もとみつ 大蔵 基照	おおくら や たろう 大蔵 彌太郎	昭和49年 12月6日 （満42歳）	東京都国分寺市
			しげやま もとひこ 茂山 宗彦		昭和50年 6月4日 （満42歳）	京都府京都市
			しげやま しげる 茂山 茂		昭和50年 9月9日 （満41歳）	京都府京都市
			いし い のりしげ 石井 則重	やまもと のりしげ 山本 則重	昭和52年 6月1日 （満40歳）	東京都渋谷区
			狂言方（和泉流）（1名）			
			のむら ぎみひと 能村 晶人		昭和47年 2月11日 （満45歳）	東京都練馬区
きよもと せつ 清元節	きよもと せつ ぼんかいかいいん 清元節保存会会員 代表者 岡村 清太郎 （清元 延寿太夫）	東京都港区	太夫（3名）			
			まるやま のり 丸山 貫	きよもと せい だ 清元 榮志太夫	昭和15年 4月29日 （満77歳）	神奈川県横浜市
			ねもと さとし 根本 諭	きよもと みよし だ 清元 美好太夫	昭和28年 4月29日 （満64歳）	東京都豊島区
			かきざわ ひでかず 柿澤 秀一	きよもと し ず こ 清元 志寿子太夫	昭和28年 7月19日 （満64歳）	東京都大田区
りゅうきゅう 琉球 舞踊	りゅうきゅう ぶ だう ぼんかいかいいん 琉球舞踊保存会会員 代表者 徳村 正吉 （宮城 能鳳）	沖縄県島尻郡与那原町	舞踊（13名）			
			とくち みよ 渡久地 美代子		昭和12年 10月15日 （満79歳）	沖縄県中頭郡西原町
			みやぎ トヨ	みやぎ とよ子	昭和13年 12月20日 （満78歳）	沖縄県沖縄市
			またよし としこ 又吉 敏子	またよし せ子	昭和14年 11月21日 （満77歳）	沖縄県那覇市
			あしとみ のりこ 安次富 紀子		昭和19年 5月31日 （満73歳）	沖縄県那覇市

			うみせど 明 海勢頭 明	うみせど あけ る	昭和20年 1月1日 (満72歳)	沖縄県島尻郡八 重瀬町
			きんじょう 光子 金城 光子		昭和20年 10月4日 (満71歳)	沖縄県那覇市
			ひが 美好 比嘉 美好		昭和22年 4月12日 (満70歳)	沖縄県那覇市
			にいざき ひろこ 新崎 弘子	こじや ひろこ 古謝 弘子	昭和24年 1月27日 (満68歳)	沖縄県中頭郡嘉 手納町
			しまぶくろ きみこ 島袋 君子		昭和24年 4月15日 (満68歳)	沖縄県那覇市
			うざ えつこ 宇座 悦子	みやぎ のうぞう 宮城 能造	昭和24年 9月19日 (満67歳)	沖縄県那覇市
			いしかわ しづえ 石川 静江	たまぐすく しづえ 玉城 静江	昭和25年 12月23日 (満66歳)	沖縄県那覇市
			ひが りょうこ 比嘉 涼子		昭和26年 10月2日 (満65歳)	沖縄県那覇市
			みやひら のりこ 宮平 則子	がなば のりこ 我那覇 則子	昭和26年 10月20日 (満65歳)	沖縄県那覇市
			歌三線（8名）			
			かつれん しげお 勝連 繁男	かつれん しげお 勝連 繁雄	昭和15年 9月18日 (満76歳)	沖縄県中頭郡北 谷町
			なかむら いち 中村 一雄		昭和21年 6月24日 (満71歳)	沖縄県那覇市
			めかる もりたか 銘苅 盛隆		昭和25年 3月4日 (満67歳)	沖縄県浦添市
			しろま せいきう 城間 盛久		昭和25年 5月9日 (満67歳)	沖縄県宜野湾市
			あらしろ はじめ 新城 治		昭和26年 4月19日 (満66歳)	沖縄県豊見城市

			照喜名 進 てらき な すずむ		昭和29年 1月11日 (満63歳)	沖縄県那覇市
			島袋 功 しまぶくろ いさお		昭和30年 10月11日 (満61歳)	沖縄県名護市
			仲嶺 伸吾 なかみね しんご		昭和37年 9月12日 (満54歳)	沖縄県那覇市
			箏 (5名)			
			山内 照子 やまうち てるこ		昭和18年 12月25日 (満73歳)	沖縄県沖縄市
			名嘉 ヨシ子 な か よしこ		昭和22年 6月12日 (満70歳)	神奈川県横浜市
			赤嶺 和子 あかみね かずこ		昭和22年 9月22日 (満69歳)	沖縄県豊見城市
			上地 律子 うえち りつこ		昭和23年 3月5日 (満69歳)	沖縄県宜野湾市
			安慶名 久美子 あけな くみこ		昭和25年 7月13日 (満67歳)	沖縄県うるま市
			太鼓 (1名)			
			比嘉 聰 ひが さとし		昭和27年 4月8日 (満65歳)	沖縄県那覇市

(5) 重要無形文化財の指定及び保持団体の認定

重 要 無 形 文 化 財		保 持 団 体	
名 称	名 称	代表者	事務所の所在地
つがるぬり 津軽塗	つがるぬりぎじゅつほぞんかい 津軽塗技術保存会	会長 いわや たけじ 岩谷 武治	青森県弘前市賀田 ^{よしだ} 1－1－1 弘前市教育委員会内
えちぜんとり こし 越前鳥の子紙	えちぜん きすきとり こし ほぞんかい 越前生漉鳥の子紙保存会	会長 やなせ はるお 柳瀬 晴夫	福井県越前市 新在家町8－4 4 福井県和紙工業 協同組合内

Ⅱ. 解説

〔（１）重要無形文化財の指定及び保持者の認定（各個認定）〕

（芸能の部）

1 ^{のうはやしかたこつみ} 能囃子方小鼓 ^{おおくら} 大倉 ^{げんじろう} 源次郎

^{のうはやしかたこつみ}「能囃子方小鼓」は、平成１０年６月８日に重要無形文化財に指定されたが、平成２７年１２月２日、保持者の逝去により指定が解除された。今回、改めて指定するとともに、^{おおくら}大倉氏をその保持者として認定するものである。

（１）重要無形文化財の指定について

① 名称

^{のうはやしかたこつみ}
能囃子方小鼓

② 重要無形文化財の概要

能は、１４世紀後半から１５世紀にかけて、^{かんあみ}観阿弥、^{ぜあみ}世阿弥などによって大成された仮面を用いる^{がくげき}楽劇である。極度に簡素化された様式の中、人間の思想、感情の^{きび}機微を繊細な感覚をもって表現する技術、形式を今日に継承し、また後続の諸芸能の発展の基礎をつくった点においても重要なものである。

能の器乐的要素を担当する^{はやしかた}囃子方には、^{こつみ}笛、^{おおつみ}小鼓、^{こつみ}大鼓、^{おおつみ}太鼓の四楽器の役がある。そのうち^{こつみ}小鼓は、基本的に四種の打法が打ち分けられ、鋭く甲高い大鼓の音とは対照的に、柔らかく変化に富んだ音色で奏される。曲中の状況や人物の心情を表現するのみならず、^{おおつみ}大鼓とともに^{うたい}謡の調子、リズムを調整する重要な役割を担っており、さらには器楽のみで成立する^{まいごと}舞事の部分や、シテやワキなどが登場する^で出の囃子においても活躍するなど、^{こつみ}小鼓は能を成立させる上で欠くことのできない技法である。

以上のように、^{のうはやしかたこつみ}能囃子方小鼓は、芸術上特に価値が高く、芸能史上特に重要な地位を占め、かつ能の成立、構成上重要な要素をなす技法である。

(2) 保持者の認定について

① 保持者

氏 名 おおくら げん じろう 大倉 源次郎

生年月日 昭和32年9月7日（満59歳）

住 所 東京都世田谷区

② 保持者の特徴

同人は、伝統的なのうはやしかたこつみ能囃子方小鼓の技法を高度に体现し、重要曲を数多く務めながら卓越した技量を示すのみならず、積極的な演奏活動を展開している。また、しかい斯界の発展に貢献するほか、後進の指導・育成にも尽力している。

③ 保持者の概要

同人は、こつみかた小鼓方大倉流一五世宗家であった大倉 そう け長 十郎 ちようじゅうろうの次男として大阪に生まれた。幼少より父の教えを受けた同人は、昭和40年に初舞台を踏み、同48年みだれ「乱」、同49年「石 橋」しゃっきょう、同53年には「道成寺」どうじょうじと若くして重要曲を次々と披いた。同60年に父が逝去したことに伴い、そう け小鼓方大倉流一六世宗家を継承した後もたまめ修練を重ね、のうはやしかたこつみ能囃子方小鼓の技法を高度に体得するに至った同人は、平成14年の「関寺小町」せきでらこまちなど、さいおう能の最奥の秘曲とされる三老女をすべて披いたほか、重要曲を数多く務めながら舞台活動を続けてきた。

曲目を問わず、常にあらゆる きよくしゆ曲 趣を的確に表現する同人の安定した技量、そして舞台への積極的な姿勢は、他の能楽師からも信頼が厚く、重要曲が上演される機会には、東京、関西を問わず多くの依頼があるなど、現在の能楽界において同人は主要な位置を占めている。一方、同人は専門能楽師によって組織される社団法人能楽協会（現 公益社団法人能楽協会）の理事を歴任し、しかい斯界の振興発展にも尽力してきた。また、同人は平成14年から国立劇場伝統芸能伝承者養成「能楽（三役）さんやく」研修において主任講師を継続するなど、後継者の育成にも努めている。

以上のように、同人は、のうはやしかたこつみ能囃子方小鼓の技法を正しく体得し、かつ、これに精通しているとともに、その技法を高度に体现している。

④ 保持者の略歴

昭和40年 どっ こ あゆ の だん独鼓「鮎之段」にて初舞台

同 45年 初能 いわふね「岩船」を務める

同 48年 みだれ ひら「乱」を披く

- 同 49年 「石橋」を披く
- 同 53年 「道成寺」を披く
- 同 60年 小鼓方大倉流一六世宗家を継承，大鼓方大倉流宗家預りとなる
(現在に至る)
- 同 62年 昭和61年度大阪文化祭賞奨励賞
- 平成 3年 重要無形文化財「能楽」(総合認定)保持者
- 同 年 大阪市咲くやこの花賞
- 同 14年 国立劇場伝統芸能伝承者養成「能楽(三役)」研修主任講師
(現在に至る)
- 同 年 「関寺小町」を披く
- 同 15年 社団法人能楽協会(現 公益社団法人能楽協会)理事(同17年
まで，及び同19年より現在まで)
- 同 27年 一般社団法人東京能楽囃子科協議会理事(現在に至る)
- 同 28年 第37回観世寿夫記念法政大学能楽賞

(3) 備考

同分野の既認定者

(死亡解除)

幸 五郎(芸名 幸 祥光)

(昭和30年2月15日指定・認定～昭和52年4月6日認定解除)

幸 靖二(芸名 幸 宣佳)

(昭和49年4月20日認定～昭和52年9月6日指定・認定解除)

鵜沢 壽

(昭和57年4月20日指定・認定～平成9年3月30日指定・認定解除)

曾和 博(芸名 曾和 博朗)

(平成10年6月8日指定・認定～平成27年12月2日指定・認定解除)

北村 治

(平成15年7月10日認定～平成24年7月31日認定解除)



おおくらげんじろう
(大倉源次郎氏)



おおくらげんじろう
(演奏中の大倉源次郎氏) (撮影：山口宏子)

2 くみおどりおんがくたいこ 組踊音楽太鼓 ひがさとし 比嘉 聰

「組踊音楽太鼓」は、平成15年7月10日に重要無形文化財に指定されたが、平成18年1月10日、保持者の逝去により指定が解除された。今回、改めて指定するとともに、比嘉氏をその保持者として認定するものである。

(1) 重要無形文化財の指定について

① 名称

くみおどりおんがくたいこ
組踊音楽太鼓

② 重要無形文化財の概要

組踊は、清と朝貢関係にあった琉球において、冊封使を歓待する御冠船躍として、躍奉行の玉城朝薫によって創作された。朝薫は琉球内外の芸能に通じ、能楽や歌舞伎などの要素を取り入れ、台詞、音楽、舞踊が一体となった独自の芸能様式を創り上げた。組踊は、1719年、尚敬王冊封での重陽宴で初演されて以降、士族の男子が演じたが、明治12年の廃藩置県の後には民間の芝居に伝わり、商業演劇として演じられ、更に芸術性を高めた。

組踊音楽は、歌三線、箏、太鼓、笛、胡弓で構成され、演技者の台詞や所作と密接に関連して演奏される。なかでも太鼓は、各場面の状況や人物の心情を歌いだす歌三線を補助して、音楽全体の表現に深みを与えると同時に、時に単独で演奏されて、演技者の動きにきっかけを与えたり、激しい感情の動きや物語の展開を表現したりするもので、組踊に欠くことの出来ない重要な役割を担っている。

以上のように、組踊音楽太鼓は、組踊に欠くことができない技法のひとつとして、芸術上特に価値が高く、芸能史上特に重要な地位を占め、かつ、組踊の成立、構成上重要な要素をなす技法である

(2) 保持者の認定について

① 保持者

氏 名 比嘉 聡

生年月日 昭和27年4月8日（満65歳）

住 所 沖縄県那覇市

② 保持者の特徴

同人は、伝統的な組踊音楽太鼓の技法を高度に体現し、積極的な舞台活動を展開して卓越した技量を示している。また、斯界の発展及び後進の指導・育成にも尽力している。

③ 保持者の概要

同人は、昭和27年に沖縄に生まれた。昭和47年、太鼓を島袋光史（重要無形文化財「組踊音楽太鼓」（各個認定）保持者）に、歌三線を棚原忠徳に師事して本格的な修業を始め、同54年、野村流組踊地謡研究会主催第1回「組踊を聞く」における「万歳敵討」で、組踊音楽太鼓の初舞台を務めた。昭和60年には、光史流太鼓保存会比嘉聡練場を開き後継者の育成を開始するも、さらに、師の薫陶のもと修練を積み、同63年、太鼓の師範免許を取得した。同人は、師の没後も研鑽に励み、組踊音楽太鼓の演奏技法を高度に体得するに至り、平成27年、重要無形文化財「組踊」（総合認定）保持者に認定された。

曲趣を的確に捉え、端正で抑制のきいた同人の演奏は、組踊を豊かに表現するものとして高く評価されている。加えて、島袋光史から学んだ組踊全般に及ぶ知識と、その上に確立された組踊に対する深い理解、見識は、斯界から厚い信頼が寄せられ、東京国立劇場や国立劇場おきなわの主催公演をはじめ、芸術祭主催公演など数多くの主要な舞台に出演し、優れた舞台成果を世に示している。

また、自らの一門における弟子の養成に加え、沖縄県立芸術大学教授や国立劇場おきなわ組踊研修講師を務めて後進の指導にあたり、斯界の発展と後継者の育成にも貢献している。

以上のように、同人は、組踊音楽太鼓の技法を正しく体得し、かつ、これに精通

するとともに、その技法を高度に体現している。

④ 保持者の略歴

- 昭和47年 太鼓を島袋光史^{しまぶくろ みつふみ}に、歌三線^{うたさんしん}を棚原忠徳^{たなはらただのり}に師事
- 同 51年 教師免許（太鼓）取得
- 同 54年 野村流組踊地謡研究会主催第1回「組踊を聞く」における「万歳敵討^{まんざいてき}」で組踊音楽太鼓の初舞台
- 同 56年 教師免許（歌三線^{うたさんしん}）取得
- 同 60年 光史流太鼓保存会比嘉聰^{ひ が さとし}練場を開き、後継者の育成をはじめる
- 同 63年 師範免許（太鼓）取得
- 平成 3年 師範免許（歌三線^{うたさんしん}）取得
- 同 8年 沖縄県立芸術大学非常勤講師（同27年まで）
- 同 13年 沖縄県指定無形文化財「沖縄伝統舞踊」保持者（現在に至る）
- 同 17年 国立劇場おきなわ組踊研修講師（現在に至る）
- 同 23年 比嘉聰^{ひ が さとし}独演会「光源の響き^{こうげん}」（於：国立劇場おきなわ大劇場）
- 同 27年 沖縄県立芸術大学教授（現在に至る）
- 同 年 重要無形文化財「組踊^{くみおどり}」（総合認定）保持者

（3）備考

同分野の既認定者

（死亡解除）

しまぶくろ みつふみ
島袋 光史

（平成15年7月10日指定・認定～平成18年1月10日指定・認定解除）



ひ が さとし
（比嘉 聰氏）



ひ が さとし
（演奏中の比嘉 聰氏）

(工芸技術の部)

1 こいしわらやき 小石原焼 ふくしま 福島 よしぞう 善三 (雅号 ふくしま 福島 ぜんぞう 善三)

(1) 重要無形文化財の指定について

① 名称

こいしわらやき
小石原焼

② 重要無形文化財の概要

こいしわらやき 小石原焼は、現在の福岡県朝倉郡東峰村小石原に伝わる伝統的な陶芸技法で、文禄・慶長の役後に伝えられた朝鮮半島の陶技が、初期のたかとりやき高取焼を経て17世紀末に同地に定着したのがその始原であるとされている。以来、同地から採取される鉄分を多く含む陶土を用いて成形し、てつゆう鉄釉・かいゆう灰釉などを施したり、更にゆうやく釉薬の打ち掛け、なが流し掛け、か櫛目、くしめ指描、ゆびがき刷毛目、はけめ飛鉋などの技法によって装飾した陶器が製作されてきた。

今日のこいしわらやき小石原焼においては、伝統的な原材料及びその用法や製作技法が伝承された上に更なる創意工夫が加えられ、表現の幅が広がられている。

以上のように、こいしわらやき小石原焼は、芸術上価値が高く、工芸史上重要な地位を占め、かつ、地方的特色が顕著なものである。

(2) 保持者の認定について

① 保持者

氏 名 ふくしま 福島 よしぞう 善三 (雅号 ふくしま 福島 ぜんぞう 善三)

生年月日 昭和34年10月29日 (満57歳)

住 所 福岡県朝倉郡東峰村

② 保持者の特徴

同人は、伝統的なこいしわらやき小石原焼の制作技法を高度に体得し、伝統的に用いられてきた材料やゆうやく釉薬を研究し、その特質を活かした様々な表現による作品によって日本伝統工芸展等で受賞を重ね、高い評価を得ており、後進の指導・育成にも尽力している。

③ 保持者の概要

同人は、福岡県朝倉郡東峰村小石原に、17世紀末から続くこいしわらやき小石原焼窯元・ちが

いわ窯を営む父・福嶋^{つかさ}司の長男として生まれ、祖父・福嶋^{あらじろう}荒次郎、父に師事して小石原焼^{こいしわらやき}の技法を習得した。その後更に技法表現の研究を重ねながら技の錬磨に努め、伝統的な陶芸技法を高度に体得した。

同人は、古来小石原^{こいしわら}において用いられてきた原材料や釉薬^{ゆうやく}を研究し、これに精通している。特に、同地から産する陶土及び、釉薬^{ゆうやく}の原料に使われる鉄鉱石などの特質に注目し、これらに含まれる鉄分を調整し、その焼成時の酸化あるいは還元による発色を効果的に使い分け、更に創意工夫を加えることによって、「鉄釉^{てつゆう}」「赫釉^{かくゆう}」「中野飴釉^{なかのあめゆう}」「鈞窯釉^{きんようゆう}」「中野月白釉^{なかのげつぱくゆう}」などによる様々な表現に取り組んできた。これらの表現による作品は、いずれも現代感覚あふれるものであり、その作風は極めて芸術性が高く、小石原焼^{こいしわらやき}の世界に新生面^{ひら}を拓いたものとして高い評価を得ている。

同人は、日本伝統工芸展を中心に作品を発表しており、平成15年、第50回日本伝統工芸展において日本工芸会総裁賞（優秀賞）、同25年の第60回同展において高松宮記念賞（優秀賞）を受賞した。また同人は、平成11年に第15回日本陶芸展大賞・桂宮賜杯、同16年に第14回MOA岡田茂吉賞工芸部門優秀賞、同26年に日本陶磁協会賞を受賞するなど、多方面から高い評価を得ている。さらに、平成26年には、紫綬褒章を受章した。また、同人は、平成27年の第62回日本伝統工芸展で鑑査委員を務めるなど、後進の指導・育成にも尽力している。

以上のように、同人は、小石原焼^{こいしわらやき}の制作技法を高度に体得しており、かつ、これに精通している。

④ 保持者の略歴

- 昭和57年 祖父・福嶋^{あらじろう}荒次郎、父・福嶋^{つかさ}司に師事
- 同 63年 第35回日本伝統工芸展初入選
- 平成 4年 社団法人日本工芸会（現 公益社団法人日本工芸会）日本工芸会正会員（現在に至る）
- 同 11年 第15回日本陶芸展大賞・桂宮賜杯
作品「中野飴釉^{なかのあめゆう}掛分鉢^{かけわけばち}」
- 同 15年 第50回日本伝統工芸展日本工芸会総裁賞（優秀賞）
作品「鉄釉^{てつゆう}掛分条^{かけわけじょう}文鉢^{もんばち}」
- 同 16年 第14回MOA岡田茂吉賞工芸部門優秀賞
- 同 25年 第60回日本伝統工芸展高松宮記念賞（優秀賞）
作品「中野月白^{なかのげつぱく}瓷^じ深鉢^{ふかばち}」

同 26年 平成25年度日本陶磁協会賞
同 年 紫綬褒章
同 27年 第62回日本伝統工芸展鑑査委員

(3) 備考

同分野の既認定者

なし



ふくしまよしざう
(福嶋善三氏)



ふくしまよしざう
(制作中の福嶋善三氏)

〔(2) 重要無形文化財の保持者の追加認定(各個認定)〕

(芸能の部)

- 1 ^{にんぎょうじょうりぶんらくにんぎょう}人形浄瑠璃文楽人形 ^{おぎの}荻野 ^{つねとし}恒利(芸名 ^{よしだ}吉田 ^{かずお}和生)

^{にんぎょうじょうりぶんらくにんぎょう}「人形浄瑠璃文楽人形」は、昭和52年4月25日に重要無形文化財に指定され、
現在、保持者として^{ひらおかつよし}平尾勝義(芸名 ^{よしだみのすけ}吉田襄助)氏が認定されている。現保持者に加えて、
荻野氏を保持者として「追加認定」するものである。

(1) 重要無形文化財^{にんぎょうじょうりぶんらくにんぎょう}「人形浄瑠璃文楽人形」について

^{にんぎょうじょうりぶんらく}人形浄瑠璃文楽は、^{さんぎょう}三業(太夫・三味線・人形)で構成される舞台芸術で、18世
紀中頃に大成した。物語を語る^{たゆう}太夫、各場面の情景等を表現する三味線、^{たゆう}太夫と三味
線の^{ぎだゆうぶし}義太夫節にのせて演技する人形によって展開する。^{にんぎょうじょうりぶんらく}人形浄瑠璃文楽の人形は、一
つの人形を^{おもづか}主遣い、^{ひだりづか}左遣い、^{あしづか}足遣いの三人で遣うという世界の人形芝居にその比を見

ない繊細巧緻なもので、高度の芸術的価値を持つとともに、その演技演出の様式等、我が国演劇史上に遺した足跡は大きく、芸能史的にも重要な地位を占めている。

(2) 保持者の認定について

① 保持者

氏 名 おぎの つねとし 恒利（芸名 よしだ かずお 吉田 和生）
生年月日 昭和22年7月28日（満69歳）
住 所 兵庫県芦屋市

② 保持者の特徴

同人は、伝統的な人形浄瑠璃文楽人形の技法を高度に体现し、斯界を代表する一人として主要な役を担当しつつ活躍を続け、舞台において落ち着きと品格をもって人物の内面を的確に表現している。また、後進の指導・育成にも尽力している。

③ 保持者の概要

同人は、昭和22年に愛媛県で生まれ、同42年に文楽協会人形部研究生となった。同年、吉田文雀（重要無形文化財「人形浄瑠璃文楽人形」（各個認定）保持者）に入門し、翌43年に初舞台を踏んだ同人は、以後約半世紀にわたって、師が没するまでその教えを受けつつ芸歴を重ね、長きにわたる研鑽を積んで高い技量を体得した。

同人の遣う人形の役柄は、女方を中心として立役にも及ぶ。立役では「菅原伝授手習鑑」の武部源蔵や桜丸、女方では「摂州合邦辻」の玉手御前、老女役である「信州川中島合戦」の越路など、多くの役柄を通じてその力量を示している。同人は師の芸風を継承し、各演目の物語や主題を深く掘り下げ、舞台では落ち着きと品格をもって登場人物の内面を的確に表現している。これら同人の舞台に対しては、芸術選奨文部科学大臣賞などが授与されている。

また同人は、優れた技芸をもって活発な舞台活動を展開するのみならず、国立劇場伝統芸能伝承者養成「文楽」研修講師を務めるなど、後継者の育成にも力を注いできた。さらには、公演ごとに、各演目の登場人物に使用するかしらを決める「かしら割委員」の役割も師より継承し、今日の文楽の上演のために欠かせない存在となっている。

以上のように、同人は、人形浄瑠璃文楽人形の技法を正しく体得し、かつ、これに精通しているとともに、その技法を高度に体现している。

④ 保持者の略歴

昭和42年 ^{ぶんらく}文楽協会人形部研究生となる
同 年 ^{ぶんじゃく}吉田文雀^{かずお}に入門, ^{ぶんらく}吉田和生の芸名を名乗る
同 43年 大阪毎日ホールにて初舞台
同 62年 重要無形文化財「^{にんぎょうじょうるりぶんらく}人形浄瑠璃文楽」(総合認定)保持者
平成 3年 平成2年度文楽協会賞
同 4年 平成3年度(第11回)国立劇場^{ぶんらく}文楽賞文楽奨励賞
同 14年 国立劇場伝統芸能伝承者養成「^{ぶんらく}文楽」研修講師(現在に至る)
同 16年 平成15年度大阪文化祭賞
同 18年 平成17年度(第25回)国立劇場^{ぶんらく}文楽賞文楽優秀賞
同 26年 平成25年度(第64回)芸術選奨文部科学大臣賞
同 年 ^{えがお}愛顔のえひめ文化・スポーツ賞
同 27年 平成26年度(第34回)国立劇場^{ぶんらく}文楽賞文楽大賞
同 年 かしら割委員を務める(現在に至る)

(3) 備考

同分野の既認定者

(死亡解除)

^{いそがわ}磯川 ^{さきち}佐吉(芸名 ^{きりたけ}二世 桐竹 ^{もんじゅうろう}紋十郎)

(昭和40年4月20日指定・認定～昭和45年8月21日指定・認定解除)

^{うえだ}上田 ^{すえいち}末一(芸名 ^{よしだ}吉田 ^{たまお}玉男)

(昭和52年4月25日指定・認定～平成18年9月24日認定解除)

^{みやなが}宮永 ^{ゆたか}豊(芸名 ^{きりたけ}二世 桐竹 ^{かんじゅうろう}勘十郎)

(昭和57年4月20日認定～昭和61年8月14日認定解除)

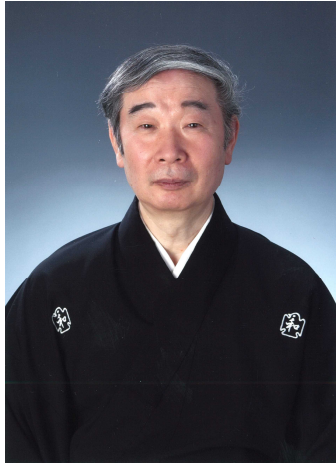
^{つかもと}塚本 ^{かずお}和男(芸名 ^{よしだ}吉田 ^{ぶんじゃく}文雀)

(平成6年6月27日認定～平成28年8月20日認定解除)

(現保持者)

^{ひらお}平尾 ^{かつよし}勝義(芸名 ^{よしだ}吉田 ^{みのすけ}襄助)

(平成6年6月27日認定)



おぎのつねとし
(荻野恒利氏)



おぎのつねとし
(演技中の荻野恒利氏) (撮影：河原久雄)

〔（３）重要無形文化財の指定及び保持者の団体の構成員の認定（総合認定）〕

1 ^{ながうた}長唄 ^{でんとうながうた ほ ぞんかい いん}伝統長唄保存会会員 68名

（１）重要無形文化財の指定について

① 名称 ^{ながうた}長唄

② 重要無形文化財の概要

^{ながうた}長唄は、18世紀以降に歌舞伎音楽として特に江戸で発達し、その後、劇場から離れた純粹の音楽としても展開をみせた三味線音楽である。その表現は、地歌をはじめとして、^{ぎだゆうぶし}義太夫節、^{おおざつまぶし}大薩摩節、^{ぶんごぶし}豊後節などの諸浄瑠璃その他の要素を取り入れ、高度な技法を用いた豊富な内容を有している。数ある三味線音楽の中でも、歌い物を代表する音楽として、我が国の音楽史上において重要であるばかりでなく、^{くろみす}黒御簾音楽を担当するなど、歌舞伎の上演にも不可欠なものとなっている。

^{ながうた}長唄は、唄、三味線、^{なりもの}鳴物（^{はやし}囃子）から構成されるが、その演奏は数十人に及ぶ多人数の合奏から、^{にちょういちまい}二挺一枚（唄1名、三味線2名）といった小規模のものまで多様な形態を有する。他の三味線音楽に比してリズムが明確であり、^{ほそざお}細棹三味線による明るい旋律、^{なりもの}鳴物による華やかな器楽演奏などに特色がある。また、代々の演奏家が各時代に合わせた作曲や演奏上の工夫を重ね、音楽的に多彩な内容を持っている。

以上のように、^{ながうた}長唄は、芸術上特に価値が高く、芸能史上特に重要な地位を占め

るものである。

(2) 保持者の団体の構成員の認定について

今回認定する68名は、^{ながうた}長唄の技法を高度に体现し、重要無形文化財「^{ながうた}長唄」の保持者としてふさわしい者であるので、重要無形文化財「^{ながうた}長唄」の保持者の団体の構成員（^{でんとうながうたほぞんかい}伝統長唄保存会会員）として認定するものである。



(^{ながうた}「長唄」演奏の様子)

〔(4) 重要無形文化財の保持者の追加認定（総合認定）〕

1 ^{にんぎょうじょうりふんらく}人形浄瑠璃文楽（^{にんぎょうじょうりふんらく ざざいん}人形浄瑠璃文楽座座員）

^{にんぎょうじょうりふんらく}「人形浄瑠璃文楽」は、昭和30年5月12日に重要無形文化財に指定され、その保持者として^{にんぎょうじょうりふんらく ざざいん}人形浄瑠璃文楽座座員が総合的に認定され、現在54名の保持者がいる。これらの保持者に加えて、7名を保持者の団体の構成員として「追加認定」するものである。

(1) 保持者の団体の構成員の追加認定について

今回認定しようとする7名は、^{にんぎょうじょうりふんらく}人形浄瑠璃文楽の技法を高度に体现し、重要無形文化財「^{にんぎょうじょうりふんらく}人形浄瑠璃文楽」の保持者としてふさわしい者であるので、重要無形文化財「^{にんぎょうじょうりふんらく}人形浄瑠璃文楽」の保持者の団体の構成員（^{にんぎょうじょうりふんらく ざざいん}人形浄瑠璃文楽座座員）として追加認定するものである。

(2) 備考

① 追加認定の経過

第1次認定	99名	昭和30年	5月12日
第2次認定	12名	昭和62年	4月20日
第3次認定	4名	平成5年	4月15日
第4次認定	18名	平成11年	6月21日
第5次認定	7名	平成16年	9月2日
第6次認定	3名	平成19年	9月6日
第7次認定	6名	平成22年	9月6日
第8次認定	4名	平成26年	10月23日
現保持者数	54名		

(延べ153名)

② 今回追加認定後の保持者数

61名 (延べ160名)

2 のうがく いっぱんしゃだんほうじんにほんのうがくかい 能楽 (一般社団法人日本能楽会会員)

のうがく「能楽」は、昭和32年12月4日に重要無形文化財に指定され、その保持者として いっぱんしゃだんほうじんにほんのうがくかい 一般社団法人日本能楽会会員が総合的に認定され、現在482名の保持者がいる。これらの保持者に加えて、45名を保持者の団体の構成員として「追加認定」するものである。

(1) 保持者の団体の構成員の追加認定について

今回認定しようとする45名は、のうがく能楽の技法を高度に体现し、重要無形文化財「のうがく能楽」の保持者としてふさわしい者であるので、重要無形文化財「のうがく能楽」の保持者の団体の構成員 (いっぱんしゃだんほうじんにほんのうがくかい 一般社団法人日本能楽会会員) として追加認定するものである。

(2) 備考

① 追加認定の経過

第1次認定	40名	昭和32年	12月4日
第2次認定	100名	昭和40年	4月20日

第 3 次認定	3 7 名	昭和 4 2 年	5 月 3 0 日
第 4 次認定	4 5 名	昭和 4 7 年	5 月 1 6 日
第 5 次認定	1 1 6 名	昭和 5 0 年	5 月 2 8 日
第 6 次認定	6 4 名	昭和 5 3 年	5 月 3 1 日
第 7 次認定	6 1 名	昭和 5 7 年	5 月 2 7 日
第 8 次認定	6 4 名	昭和 6 1 年	4 月 2 8 日
第 9 次認定	7 0 名	平成 3 年	1 1 月 1 日
第 1 0 次認定	5 7 名	平成 1 0 年	6 月 8 日
第 1 1 次認定	7 2 名	平成 1 3 年	7 月 1 2 日
第 1 2 次認定	6 7 名	平成 1 6 年	9 月 2 日
第 1 3 次認定	2 9 名	平成 1 9 年	9 月 6 日
第 1 4 次認定	3 3 名	平成 2 3 年	9 月 5 日
第 1 5 次認定	6 2 名	平成 2 6 年	1 0 月 2 3 日
現保持者数	4 8 2 名		
	(延べ 9 1 7 名)		

② 今回追加認定後の保持者数
5 2 7 名 (延べ 9 6 2 名)

3 ^{きよもとぶし}清元節 (^{きよもとぶしほぞんかい}清元節保存会会員)

^{きよもとぶし}「清元節」は、平成 2 6 年 1 0 月 2 3 日に重要無形文化財に指定され、その保持者と^{きよもとぶしほぞんかい}して清元節保存会会員が総合的に認定され、現在 1 9 名の保持者がいる。これらの保持者に加えて、3 名を保持者の団体の構成員として「追加認定」するものである。

(1) 保持者の団体の構成員の追加認定について

今回認定しようとする 3 名は、^{きよもとぶし}清元節の技法を高度に体现し、重要無形文化財「^{きよもとぶし}清元節」の保持者としてふさわしい者であるので、重要無形文化財「^{きよもとぶし}清元節」の保持者の団体の構成員 (^{きよもとぶしほぞんかい}清元節保存会会員) として追加認定するものである。

(2) 備考

① 追加認定の経過

第1次認定 20名 平成26年10月23日

現保持者数 19名
(延べ 20名)

② 今回追加認定後の保持者数

22名(延べ23名)

4 ^{りゅうきゅうぶよう}琉球舞踊(^{りゅうきゅうぶようほぞんかいがいん}琉球舞踊保存会会員)

^{りゅうきゅうぶよう}「琉球舞踊」は、平成21年9月2日に重要無形文化財に指定され、その保持者として ^{りゅうきゅうぶようほぞんかいがいん}琉球舞踊保存会会員が総合的に認定され、現在32名の保持者がいる。これらの保持者に加えて、27名を保持者の団体の構成員として「追加認定」するものである。

(1) 保持者の団体の構成員の追加認定について

今回認定しようとする27名は、^{りゅうきゅうぶよう}琉球舞踊の技法を高度に体現し、重要無形文化財「^{りゅうきゅうぶよう}琉球舞踊」の保持者としてふさわしい者であるので、重要無形文化財「^{りゅうきゅうぶよう}琉球舞踊」の保持者の団体の構成員(^{りゅうきゅうぶようほぞんかいがいん}琉球舞踊保存会会員)として追加認定するものである。

(2) 備考

① 追加認定の経過

第1次認定 39名 平成21年 9月 2日

現保持者数 32名
(延べ 39名)

② 今回追加認定後の保持者数

59名(延べ66名)

〔（５）重要無形文化財の指定及び保持団体の認定〕

1 ^{つがるぬり}津軽塗 ^{つがるぬりぎじゅつほぞんかい}津軽塗技術保存会

（１）重要無形文化財の指定について

① 名称

^{つがるぬり}
津軽塗

② 重要無形文化財の概要

^{つがるぬり}津軽塗は、青森県弘前市を中心とする津軽地方に伝承されている漆器製作技術である。

同地では、１７世紀後半に、弘前藩主により^{ぬし}塗師などが招致されて漆芸技術が発展し、１８世紀前半までには、様々な^{かわぬり}変り塗を用いた製作が行われるようになった。

現在の^{つがるぬり}津軽塗の製作は、^{きじ}榛地の工程と、下地から塗りを経て仕上げに至る漆芸の工程に大別され、それぞれを専門の技術者が分業で行う。^{きじ}榛地は、古くから地元で入手することができた^{ひば}檜葉などを原材料に用い、^{さしもの}指物、^{ひきもの}挽物などの精巧な木工技術によって製作される。漆芸の工程は、堅牢な下地に^{かわぬり}変り塗などを施すもので、その多様さが^{つがるぬり}津軽塗の大きな特色である。代表的な^{かわぬり}変り塗は、「^し仕掛^かけ^{うるし}漆（^{しぼうるし}絞漆）」や「^{たねうるし}種漆」を用いる各種の^{とぎだしかわぬり}研出変り塗である。また、複数の技法を併用したり文様を描き加えたりすることによって、華やかな色彩や質感を活かした無数の表現が可能となる。

^{かわぬり}変り塗を自在に駆使するためには、塗りの種類に応じた適切な漆の調合・調整と、高度な研ぎが必要とされる。^{つがるぬり}津軽塗は、こうした多様な^{かわぬり}変り塗の技術が、今日まで同一地方にまとまって伝承されている点で他に類を見ない。

以上のように、^{つがるぬり}津軽塗は、芸術上価値が高く、工芸史上重要な地位を占め、かつ、地方的特色が顕著なものである。

③ 指定の要件

一 原材料は次のとおりとすること。

1 ^{きじ}榛地は、^{ひば}檜葉、^{とち}栃、^{けやき}榎、^{かつら}桂等の国産材であること。

2 天然の^{うるしえき}漆液を使用すること。

二 伝統的な製法と製作用具によること。

1 ^{きじ}榛地の製作は、^{さしもの}指物、^{ひきもの}挽物等の技法によること。

2 接着部には^{こくそ}刻苧づめを施し、布着せには麻布を用いること。

3 下地は、^じ地の粉、^と砥の粉、^{きうるし}生漆等を用いて繰り返し塗布する「^{かたしたじ}堅下地」とすること。

4 漆塗りは、伝承された漆調合・調整法による^{かわぬり}変り塗を中心とすること。

三 伝統的な^{つがるぬり}津軽塗の作調、品格等の特質を保持すること。

(2) 保持団体の認定について

① 保持団体

名	称	^{つがるぬりぎじゅつほぞんかい} 津軽塗技術保存会			
代	表	者	^{いわや} 会長	^{たけじ} 岩谷	^{よし} 武治
事務所の所在地		青森県弘前市 ^{よした} 賀田 1－1－1 弘前市教育委員会内			

② 保持団体の概要

^{つがるぬりぎじゅつほぞんかい}津軽塗技術保存会は、^{つがるぬり}津軽塗の品格と技術の保存・向上を図ることを目的として、平成13年に設立された団体であり、^{つがるぬり}伝統的な津軽塗の製作技術を高度に体得した者などによって構成される。

同会は、設立以来、江戸時代以降の^{つがるぬり}津軽塗の調査及び技法再現事業を毎年実施してきた。加えて平成23年からは、伝承者養成、伝承・研究成果の発表、原材料・用具確保などの事業に取り組み、同技術の保存と伝承に尽力している。

平成27年、「^{つがるぬり}津軽塗」が弘前市の無形文化財に指定されたのに伴い、同会はその保持団体として認定され、同28年、「^{つがるぬり}津軽塗」が青森県技芸に指定されたのに伴い、その保持団体として認定されて現在に至る。

以上のように、同会は、^{つがるぬり}津軽塗の製作技術を保持する者を主たる構成員とする団体であり、重要無形文化財の保持団体として適切な団体である。

(3) 備考

同分野の既認定団体

なし



かわぬり
(変り塗の工程)



八角五段重箱「お祝い」
つがるぬりぎじゅつほぞんかい
(津軽塗技術保存会 平成25～27年)

2 えちぜんとり こし 越前鳥の子紙 えちぜんきずきとり こし ほぞんかい 越前生漉鳥の子紙保存会

(1) 重要無形文化財の指定について

① 名称 えちぜんとり こし 越前鳥の子紙

② 重要無形文化財の概要

えちぜんとり こし 越前鳥の子紙は、福井県越前市に伝承されている手漉きの雁皮紙の製作技術である。

雁皮紙は、ジンチョウゲ科の雁皮を原料とする紙で、奈良時代から漉かれてきた我が国の主要な手漉和紙の一つである。かすかに黄味を帯びた色合い、滑らかで光沢のある紙肌、虫害に強く耐久性に富むという特色がある。「鳥の子」は、中世から用いられている雁皮紙の呼称の一つであり、『下学集』（文安元（1444）年）によると、紙の色が卵殻の色に似ていることに由来すると言う。

越前では、室町時代には既に料紙用の鳥の子紙が漉かれ、18世紀になると大判の間似合紙（幅三尺強）なども製作されるようになり、明治時代以降は襖紙が盛んに漉かれた。越前はその後も、我が国における鳥の子紙の主要な産地の一つとして現在に至る。

えちぜんとり こし 越前鳥の子紙は、雁皮の白皮を原料に、トロロアオイの根やノリウツギの樹皮を「ねり」として、たけず しやば たけず 竹簀又は紗張りの竹簀を用いた流し漉きの技法で漉き、銀杏の干

し板などに貼って天日又は室で乾燥させて製作する。繊維の短い雁皮を均一な紙に漉きあげるには高度な技術が必要とされるが、越前では厚手の襖紙から極薄の比較的小さな紙まで、多様な鳥の子紙を漉く技術が伝承されている。

以上のように、越前鳥の子紙は、工芸史上重要な地位を占め、かつ、地方的特色が顕著なものである。

③ 指定の要件

一 原料は、雁皮のみであること。

二 伝統的な製法と製紙用具によること。

1 白皮作業を行い、煮熟には草木灰又はソーダ灰を使用すること。

2 薬品漂白を行わず、填料を紙料に添加しないこと。

3 叩解は、手打ち又はこれに準じた方法で行うこと。

4 抄造は、「ねり」にトロロアオイ又はノリウツギを用い、竹簀又は紗張りの竹簀による流し漉きであること。

5 板干し又は鉄板による乾燥であること。

三 伝統的な越前鳥の子紙の色沢、地合等の特質を保持すること。

(2) 保持団体の認定について

① 保持団体

名 称 越前生漉鳥の子紙保存会

代 表 者 会長 柳瀬 晴夫

事務所の所在地 福井県越前市新在家 町 8－4 4 福井県和紙工業協同組合内

② 保持団体の概要

越前生漉鳥の子紙保存会は、越前鳥の子紙の伝承と技術の保存及び向上を図ることを目的とする団体である。平成27年に設立され、伝統的な越前鳥の子紙の製作技術を高度に体得した技術者によって構成される。

同会は、設立以来、伝承者養成や技術の調査研究などの事業を実施し、越前鳥の子紙の保存と伝承に尽力している。平成28年、「越前鳥の子」が福井県無形文化財に指定されたのに伴い、同会はその保持団体として認定され、現在に至る。

以上のように、同会は、越前鳥の子紙の製作技術を保持する者を主たる構成員とする団体であり、重要無形文化財の保持団体として適切な団体である。

(3) 備考

同分野の既認定団体

なし



ちり ちりと
(塵より (塵取り))



しょうし
(抄紙 (紙漉き))

Ⅲ. 参考

1. 重要無形文化財の指定制度及び保持者等の認定制度

我が国の伝統的な芸能や工芸技術のうち、芸術上又は歴史上価値の高いものを重要無形文化財として指定し、これらのわざの高度な体现者・体得者をその保持者又は保持団体として認定。

<認定の概要>

(1) 保持者

- ①各個認定・・・重要無形文化財に指定されている芸能又は工芸技術を高度に体现・体得している個人を認定。
- ②総合認定・・・重要無形文化財に指定されている芸能を2人以上の者が一体となって体现している場合に、これらの者が構成している団体の構成員を認定。

(2) 保持団体

重要無形文化財に指定される工芸技術の性格上個人的特色が薄く、かつ、当該わざを保持する者が多数いる場合には、これらの者が主たる構成員となっている団体を認定。

2. 指定・認定までの手続き

毎年1回、重要無形文化財の保持者の死亡による認定の解除数、芸能及び工芸技術の分野の実態などを踏まえて、有識者により構成する文化審議会の専門調査会における専門的な調査検討を受けて、文化審議会の答申に基づき、文部科学大臣が保持者や保持団体の認定を行っている。

3. 「重要無形文化財」の指定件数と「保持者」及び「保持団体」の認定数

保持者（各個認定）

（１）「重要無形文化財」の指定件数と「保持者（各個認定）」の認定数

区 分	芸能の部		工芸技術の部		合計	
	指定件数	保持者数	指定件数	保持者数	指定件数	保持者数
指 定 ・ 認 定 前	37	54	39	58 ※(57)	76	112 ※(111)
今回の指定・認定	2	3	1	1	3	4
指 定 ・ 認 定 後	39	57	40	59 ※(58)	79	116 ※(115)

※工芸技術の部に重複認定が１人いるため、（ ）内の数は実人員を示す

（２）「重要無形文化財保存特別助成金」の交付について

重要無形文化財保持者（各個認定）には、技の錬磨向上及び伝承者養成のための経費として、「重要無形文化財保存特別助成金」（１人年額２００万円）を交付している。

保持者（総合認定）及び保持団体

（１）「重要無形文化財」の指定件数と「保持者の団体」数及び「保持団体」数

区 分	芸能の部		工芸技術の部	
	指定件数	保持者の団体数	指定件数	保持団体数
指 定 ・ 認 定 前	13	13	14	14
今回の指定・認定	1	1	2	2
指 定 ・ 認 定 後	14	14	16	16

（２）上記団体には伝承者養成のために必要な経費を補助している。